

## 新たな挑戦と学内外協力体制整備の必要性について ～留学生センター アドバイジング・カウンセリング部門報告

田 中 京 子 ・ 柴 垣 史

### 1. はじめに

2012年度は、アドバイジング・カウンセリング部門として再出発して2年目となった、昨年度に続いて大学からの事業助成を受けたり学内外の協力者たちと連携したりしながら、活動を進めた。

大きなできごととして、留学生センター所属学生の傷害事故があった。来日後1カ月での思わぬ事故で、数カ月にわたって入院治療・リハビリを続けている。大学・部局としての事故への対応や、障がいを持つ学生の就学・学生生活について、新たな挑戦として受け止め、できる限り支援を進めてきた。2013年度から少しずつ通学できるよう、本人はもとより、家族や関係者一同、協力して努力しているところである。今後もさらに、障がいを持つ学生たちが健常学生と共に勉学・研究を行なえるための、組織としての体制整備が必要である。

一方で、日々の相談や交流プログラムも関係者で協力しながらおこない、改善の試みも行った。しかし、事務手続き・連絡体制の不備などから、学生や協力者たちとの信頼関係が失われかねない事態を経験し、今後の業務進捗への懸案も残った。後方支援体制を含めた、事務との協力体制整備の課題に直面した一年であった。

### 2. オリエンテーション：情報提供、信頼関係・交流、多文化理解の促進

留学生の渡日前から修了後にいたるまでの参加型、交流型、日本語・英語併用オリエンテーションを継続・充実させた。

#### (1) 渡日前オリエンテーション(留学生センター所属学生対象)

例年と同様、柴垣が事務室と協力し、渡日前からスタッフや学生たちと交流して信頼関係を築いていける

よう、入学予定者にメールで連絡を取り、留学生センターのホームページ上で渡日前情報、入学予定者のためのガイドブックを得てもらおうよう案内した。

これまで、情報提供者として協力してくれる先輩学生の連絡先を新入留学生センター生にのみ知らせていたが、個人情報保護のため、またFacebookといった媒体が、かなり普及しているため、あえて情報提供者リストは送らず、学生個々からの質問にはメールで回答した。

研修後他大学で専門研究を行う日本語研修生には所属予定の他大学指導教員等が出迎えの対応をし、日本語・日本文化研修生に対しては、宿舎決定後、空港から大学宿舎までの案内と宿舎入居の注意事項を渡日前にメールで知らせ、全員、自力で宿舎まで移動した。

#### (2) 到着後オリエンテーション(留学生センター所属学生対象)

例年と同様、大学でのオリエンテーションは事務室、アドバイジング・カウンセリング部門、日本語部門の連携により4月と10月に数回に分けて行なった。また、到着1カ月後を目途に手続き等が済んでいるかを確認できるようチェックリストを作成し、配付した。

到着後すぐの区役所登録等手続きは、これまで地域ボランティアとの連携で行なってきたが、留学生数の増加、ボランティアの人員不足に伴い、大学として新たな支援体制を考える必要があった。そのため学内の異文化交流サークル ACE を中心に区役所登録サポーターを募集し、地域ボランティアの補助をしながら登録や手続きを学ぶ一方、留学生支援、国際交流活動の新たな場として活躍してもらうことを期待した。なお、ACE メンバーは大学宿舎での入居受入れ支援にも協力しており、区役所登録サポートの活動後、「ACE という団体で区役所の登録サポートを引き受けるのは難しいが、興味のある個人が活動に参加することは可能」という見解を寄せてくれた。しかし謝金手続きの

滞りから、後期は登録サポート協力への呼び掛けが躊躇われ、別の支援体制を考えることとなった。

7月初旬より開始された新たな在留管理制度のもと区役所での外国人登録が廃止されたため、後期の受入れを前に国際学生交流課スタッフと昭和／千種区役所担当課へ出向き、必要手続きの仔細について教示いただいた。その情報を地域のボランティア、留学生センター事務と共有し、区役所および大学で必要な手続き双方を、協働してより速やかに行えるよう、学生の渡日翌朝の集合場所を宿舎から留学生センターへ変更するなど改善をした。地域ボランティアと現場で直接確認を取り合うことができ、また大学事務手続きに必要な書類や情報が早い段階で整い、登録オリエンテーション時の書類記入等の時間短縮を図ることができた。区役所登録後、郵便局で奨学金受給口座開設をする必要があるが、学内郵便局の協力を得て留学生センターロビーで口座開設申し込みができるようにした。これにより人員が不足する地域ボランティアに代わり、留学生センタースタッフと、一部先輩留学生の助けにより一連の手続きを効率的に行うことができた。

### (3) 帰国前オリエンテーション（日本語・日本文化研修コース生対象）

事務室と協力し、1年のプログラムを終えて9月に帰国する日本語・日本文化研修コース生に、帰国のための事務手続き、大学、宿舎、区役所ですべきこと、帰国後の過ごし方などについて、オリエンテーションをおこなった。

### (4) 交流型オリエンテーション（ワークショップ）

例年行なっているワークショップを、引き続き授業と連携させて充実させた。以下は日本の生活についてのオリエンテーションおよび学生主導の言語プログラムの報告であり、「日本の文化」「世界の言語文化」についてのワークショップは本年報の留学生支援事業報告を参照されたい。

【引越し】：例年のように、国際交流会館の退去時期の2～3カ月前に、新しい部屋探しのためのオリエンテーションを行なった。民間アパート探しにあたっては、学内の下宿斡旋窓口でもある大学生協と連携し、不動産会社のスタッフに一般的なアパート契約についてアドバイスいただいた。インターナ

ショナルレジデンス山手および妙見の宿舎入居期間は入居時から1年であるが、早い時期にオリエンテーションに参加し、情報収集をする学生の姿も少なくなかった。

【防災】今年度も環境学研究科との共同主催により、名古屋に住む外国人留学生、研究者のための地震防災研修会として初級知識編の講習を環境総合館で行なった。同研究科の山岡耕春教授と国際協力推進本部の山口博史講師の協力を得た。本講座を「知識編」と位置づけ、「実践編」は全学留学生の防災プロジェクト（総長裁量経費）チームによる講座と位置付けてこれに協力した。留学生の特徴をふまえた防災研修が全学的に大規模に行なえるようになったことは、高く評価できると思う。

### (5) 交流プログラム

留学生センターアドバイジング・カウンセリング部門では、ワークショップ以外に、主に、学生パートナーシップ（教育交流部門により1998年4月開始）と、ランゲージシャワーの2つの交流プログラムをコーディネートしている。

#### 【学生パートナーシップ】

パートナーシップは、国際交流を希望する学生の登録により、一般学生と留学生を1対1で紹介し自由に交流する「きっかけ」を提供するものであるが、1対1での交流以外に、登録者の時間とニーズに合った活動や交流が見つけれられるよう、また、一般学生同士、留学生同士でも新しい友人を見つけることができるよう、登録者に学内外の交流イベント、海外留学関係情報を提供している。

登録の際には、簡単な面談をし、彼らがどのような交流希望を持っているかを聞き、マッチングの参考としている。2012年度は、留学生9名、一般学生26名の登録があった。その中で1対1での紹介は2件にとどまったが、登録した学生に連絡が取れず、紹介の機会を逃した例が2件あった。その他は留学生センター所属生へのチューターとして紹介したり、学内の国際交流グループが企画するイベント情報を提供したりした。また、これまでのように依然として「外国語力向上」を目的とした登録者も多いが、ワークショップの「世界の言語文化を学ぶ」プログラムや学内の英語で行

われるプログラム、イベントへの参加を呼び掛けるなどした。

### 【ランゲージシャワー】

この言語交流プログラムにおける学生の活動の様子は、2012年度『名古屋大学国際交流グループ活動報告書』に詳細が記されている。

2010年度より教育学部スタッフである鈴木香津代氏がボランティアとして、特に中国語グループの企画・運営に大きく関わってくださっているが、今期は経験を踏まえ、中国語グループの言語サポーターである留学生が、ファシリテーションを学ぶための勉強会を設けるなど、言語プログラムを多様なスキルの習得の場として展開してくださった。

全体としては、多言語を目指したいという学生の要望や、NUELCなど学内で英語を練習するための活動をするグループも複数あることから、後期には「英語を練習する」から「英語を使って楽しむ」グループとし、留学生などの協力を得てスペイン語、フランス語に触れる機会を作るなどセッションに工夫も見られた。中国語グループは、特に中華圏への留学経験者が参加者の大半となり、中上級者レベルのグループ形成となった。その参加者の中から次期へのファシリテーターを担ってくれる学生が現れ、学生自らが学生へ継承していくことができるプログラムに成長しつつあると感じた。

## 3. 学生個別教育：相談

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生に限らず、在學生や他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談にも可能な限り対応した。

### (1) 相談時間

これまでと同様の相談時間確保(週7-8コマ分)を目標とした。相談時間を掲示し、その他の時間でも在室中は適宜相談に対応した。電子メールでの連絡は常時受けられるようにした。2012年度は学生の事故対応などで席をはずすことも多く、十分な対応ができなかったこともあったができる限り支障が出ないようにした。

### (2) 相談件数

様々な形や内容での相談について数値として残すことが難しいが、事務やボランティアとの連携による留学生の生活支援、オリエンテーションによる情報提供・文化理解促進、電子メールでの相談対応、問題防止に役立つ交流プログラムの企画・運営、チューターの指導調整や、メンタル相談員への紹介などの役割の中で、関連する相談が例年と同様にあった。

様々な相談の詳細その背景については、相談者個人に関わることなのでここで報告することができないが、今年度の特徴として以下を報告し、今後の活動に活かしていきたい。

#### ■ 勉強・研究

日本語研修期間後に別の大学で専門研究をする学生の場合、行く先の様々な情報を必要としているため、相談室と事務室で協力して進学先大学との連絡調整を行った。愛知教育大学は毎年教員研修生のための懇談会を催しており、このような機会は学生にとっては勿論スタッフにとっても、学生たちの環境を知るのに貴重な機会となっている。

#### ■ 宿舎

国際交流会館が充実してきたことから、多くの学生が恵まれた環境で落ち着いた生活をする事ができた。2012年度は名古屋大学生協による引っ越し相談会は前期のみの開催であったが、生協との提携不動産業者に協力を依頼し、実際に契約可能な物件情報とともに民間アパート契約の一般的な流れを引っ越しオリエンテーションで説明してもらった。民間宿舎では、これまで多くの留学生が入居してきた民間のアパートのひとつが、耐震性の問題から取り壊し・新築となり、入居者たちが新たな住居を探す必要に迫られた。住居の地震対策が進むのは重要なことであり、留学生たちへも耐震性のある住居を選ぶよう強く勧めているが、特に家族滞在の場合には安価で耐震性を備えたアパートを見つけるのは難しい。今後家族滞在を希望する人には現状を伝え、大学の寮にも家族室を増やせるよう、さらに提案をしていきたい。

広いご自宅を、留学生とルームシェアし国際交流の場にする構想を持つ地域の方から相談があった。留学生の宿舎探しの時期、家賃相場、入居に関する問題点など状況をお伝えし、今後の展開を検討してもらって

いる。

#### ■医療・健康・安全

学生の事故で、学内外関係者との連絡や調整が多く必要であった。田中も柴垣も医療や福祉についての専門知識は十分でないため、専門知識を有するスタッフにできるだけ任せるようにした。その他、心身の不調を訴える学生たちもあったが、幸い重症にはならなかった。

防災関係は普段からの研修・準備の段階を過ぎて、現在はさらに具体的な緊急時体制を整える時期となっている。学生たちへの啓発だけでなく、大学としての体制、物資の準備、等について、関係部局と協力しながら、留学生センターからできることを発信・協力した。今年度は新たな前進として、全学の防災プロジェクトチームによる防災研修会が開催され、災害対策室からは災害時持ち出しリュックの準備・配付が行われた。このリュックは留学生センターや各国際交流会館に、説明パネルと共に配付された。

#### ■家族

家族を呼び寄せた人は数名あり、呼び寄せの時期について研究や生活の状況をみながらアドバイスをした。

#### ■学生組織との連携

一昨年度のオープンフォーラム「イスラームと日本人」を契機に進めることになったプロジェクト「ムスリム学生の学生生活についての画像入り資料の冊子化」をICANU（名古屋大学イスラム文化会）と協力して進めた（詳細は留学生支援事業報告を参照）。彼らの日々の礼拝場所の確保については、大学生協と改めて相談したが、学内手続き上の問題があり具体的に進めるに至っていない。彼らの礼拝に限らず、文化交流やメンタルヘルス上の必要な活動ができる多目的室の必要性について、理解者が増え、場所が確保できるよう関係者で知恵を出し合っている。

インドネシア留学生会が留学生センターの教室も利用して土曜日の子ども向けインドネシア講座を行なっているが、高等教育・研究施設では適切な子どもの教育ができない場面もあり、大学近隣のコミュニティーセンターを紹介し、利用を始めた。留学生の子どもたちの教育はたいへん大切な問題であり、地域と連携し

ながらよい方法を引き続き探りたい。

#### ■交流・研修

パートナーシップ、ワークショップ等の参加登録などで相談室を訪れる学生たちは多い。その機会に、交流や進路、外国語学習についての相談を受けることもある。様々なプログラムを紹介し、言語も臆することなく積極的に使い実力をつけるよう、助言している。

### 4. 学部・大学院教育：授業

昨年度に続いて、今年度も日本の伝統文化を学び英語を使って発信する基礎セミナーを開講した。一部の授業を公開し、留学生センターの日本文化を学ぶワークショップとの連携講座とした。また、田中は教養科目「留学生と日本」の浮葉准教授を代表とする教員チームに例年通り参加した。

大学院国際言語文化研究科の「異文化コミュニケーション論 a/b」の授業は10年目となり、田中が担当して多文化学生チームで授業を進めた。

以上授業についての概略は本年報の「異文化交流実践を授業にフィードバック」報告にまとめた。

### 5. チューター調整・指導

留学生センター所属の学生たちへのチューター制度適用が6年目となった。相談室がチューター制度運用の調整・指導の担当をし、チューター募集、組み合わせ、オリエンテーション、書類請求などの業務を行った。留学生センター所属生には渡日後のオリエンテーションの際、申込書を配付し、希望する支援内容（日本語学習支援、専門の勉強における支援、日常支援、その他）、チューターに望むこと等を聞き、できるだけ双方の条件に合う紹介をおこなった。

昨年度から検討を始めたグループ対象のチューター制の運用について、今年度は新たな試みとして、実施を始めた。これは一対一のチューター指導の組み合わせや指導開始後の時間調整、内容調整にみられた様々な課題を解決するための方策として始めたものである。

一定の日時・場所に複数のチューターが控えていることで、留学生が必要な時に立ち寄って勉強や生活について相談できる環境が実現した。日によっては複数

の留学生たちがこの制度を利用したが、利用留学生が0の日もあり、チューターのモチベーション維持の面で課題が残った。また、活動場所が研修で利用する教室であったため、朝から午後まで同じ教室で集中的に研修を受けている留学生にとっては、授業後に同じ教室に残ることが閉塞感に繋がる様子もみられた。時間調整や連絡など相談室がすべき役割も多く、グループチューター制は今年度の試行を経て改善の余地があると感じている。

チューター活動を終える時期に留学生との雑談の中で、チューターと会う時間がなく、自分が満足できる支援を受けていないということを知った。チューターに連絡を取ったところ、定期的に会っているとの回答があった。留学生が望む支援と、実際にチューターが行う活動に相違があったと思われる。支援を受ける留学生には、遠慮をせずにチューターに要望を伝えるよう強調していく必要がある。

今年度は、チューターへの謝金手続きが滞り、年度末になっても謝金が支払われない事態となった。それについての問い合わせや苦情も多く寄せられ、事務部門と連絡しながら対応したが、学生たちとの信頼関係の中でこそ業務が遂行できる相談関係者にとって大きな痛手となった。信頼回復に努めたい。

## 6. 地域連携・講演・文化交流

名古屋大学が位置する千種区の警察署には、従来様々な形で学生たちへの安全指導に協力してもらっており、特に新生が、日本の安全神話を過度に信じていることがないよう、これまでの経験も参考にしながらオリエンテーションなどで指導している。また学生集会などが、他人によって思わぬ方向に利用されることなく行なえるよう、学生グループとも協力している。2009年1月から2012年12月まで、田中は委員として警察協議会に出席し、地域・市民安全について情報を得ると共に、国際理解の視点も入れつつ意見を伝えてきた。

千種生涯学習センター主催の偏見や差別をなくすための講座に、田中が留学生たちと共に協力した。名古屋大学の図書館に新設された「ディスカバリー・スクエア」というスペースを使い、市民と大学院生たちで

30名ほどの講座とした。学生の日本での経験やそれについての意見に、異文化コミュニケーションや多文化理解の視点を入れて解釈するという有意義な講義を協働して組み立てることができた。

## 7. センター内委員会

・安全防災部会：防災セミナーを前期に企画・運営し、後期は全学防災プロジェクトに協力した。

## 8. 学内委員会

田中は名古屋大学が運営する「こすもす保育園」の運営協議会、ハラスメント防止対策委員会の委員を継続し、構成員の子どもの保育や学内ハラスメント防止対策にこれまでの相談業務の知識や経験を活かすように努めた。

## 9. おわりに

今年度は思わぬ学生の事故や、事務との連携における不備、スタッフの体調不全などが重なり、これまでにない挑戦度の高い一年となった。(様々な変化の中で、田中も20数年の大学勤務の中で初めて自分の体調の理由から欠勤することがあった。)しかし学生たちは毎日研究をし、学生生活を送っており、それを支える私たちは通常業務の手を休めることはできない。プロジェクトなども粛々と責任を持って進めていった。

これまで20数年間にわたって留学生相談の分野で指導的役割を担ってきた松浦まち子教授が、今年度末で定年退職の時期を迎えた。それに伴って、10年間ほど留学生センター204号室で執務してきた田中と柴垣も、3月末にIB電子情報館へ引っ越し、新たな体制で勤務を始めた。新しい環境の中で、心身を鍛え精神を磨きながらさらに進んでいきたい。

大学では国際教育組織強化の気運が高まっている。留学生センターアドバイジング・カウンセリング関係教職員も、多言語・多文化教育に関わりながら蓄積してきた知見を生かしながら、組織の変化や進展に関わり、貢献していきたい。